

イスラエル映画と日本映画：語るこゝろ語らないこと

三宅 良美

はじめに

イスラエルの映画作品は近年様々な映画祭の賞にノミネートされ受賞している。賞をとった作品は日本でも字幕つきで一般の映画館か、映画祭で上映されるようになり、DVDが販売、レンタルされている。日本の映画ファンの多くは Amos Gitai を知っている。

近年といったが、実はイスラエル映画は、1970年代にも、アカデミー賞作品にコンスタントにノミネートされていた。それとは別に1970年代後半に制作された青春もの Eskimo Limon *'Lemon Popsicle'* (『グローイング・アップ』) には世界中の青年たちが共感を示した。

イスラエル映画は、ドキュメンタリー映画祭においても大きな位置を占めている。すでに伝統を築き上げている山形国際ドキュメンタリー映画祭を見てみると、イスラエルはコンスタントに参加し、印象深い作品を提供してきた。2003年の *'Route 181'* (Michel Khleifi and Eyal Sivan) は、1947年の国連決議が描いたイスラエルとパレスチナとの境界線に沿って車を走らせた旅の長編である。

テル・アビブの Ruthi Shaz と Adi Barash のカップルは、二つのドキュメンタリー映画で観る人たちを圧倒している。2005年の『ガーデン』では、Gan Hashmal (電気ガーデン) と呼ばれる、テル・アビブ赤線地帯のアパートに一室を借りて住むユダヤ人の男たちから買われる二人のパレスチナ青年にカメラが密着している。二人の極めて不安定な生活を見守るレンズの温かい目が印象的であり、観客賞を受賞した。

2011年には、イスラエルのために諜報員をやっていたパレスチナ人の家族を描く「共謀者とその家族」が最高賞である「大賞」を受賞している。イスラエルのために諜報員をやっていたことがパレスチナ当局に知られることになり、家族を引き連れてテル・アビブに入り逃亡生活を始める主人公の不安が描かれる。パレスチナ当局に暗殺されるのではないかという恐怖感、妻の病气、テル・アビブになじめず登校拒否をする息子。極めて危険な仕事に従事させておいて知らん振りをきめているイスラエル政府への、静かでありながら痛烈な批判である。

1. 「自分」さがしをする主人公たち

今回のプレ・シンポジウムの話のタイトルは「イスラエル映画と日本映画：語ることと語らないこと」である。このタイトルに至った理由は、いささか本能的なものによるが、今日のイスラエル映画と日本映画とに、何らかの共通点が感じられたからである。その共通点とは、孤独な主体、即ち、主人公（多くの場合、イスラエル映画では監督自身）が自分探しをするプロセスを描いているという点である。かたや、それを大いに語ることによって、かたや、ほとんど語らないことによって。日本の映画においてもイスラエル映画においても独白的傾向がみられ、その社会・文化的背景が主人公を特徴づけている。特にイスラエルの場合、男性による自分探しの映画が多い。下記の表は、男たちの独白的物語がテーマとなっている映画のリストである。2007年の『パラダイス・ナウ!』や2009年『アジャミ』といった重要なパレスチナ映画は残念ながら紙面の関係上ここに含まれていない。

表：男性の独白的な物語

（題名の欄：一行目：ヘブライ語のオリジナルタイトル、二行目：英語タイトル、三行目：すでに日本で公開あるいは販売されているフィルムの邦題は二重カギ括弧（『 』） そうでないものは一重カギ括弧（「 」）。一重カギ括弧の場合は筆者の和訳である。）

題 名	年	監 督	Note
<i>Kippur</i> 'Kippur' 『キプール』	1999	Amos Gitai	ヨム・キプール戦争に参加したひとりの青年の心身の傷を描く。
<i>Kikar Chalomot</i> 'Desperado Square' 「夢の広場」	2001	Beni Torti	25年前に亡き父親が閉鎖した映画館を再開し、インド映画を上映する試みを機に、語られなかった秘密が暴かれていく。
<i>Chatuna meucheret</i> 'Late Marriage' 「遅い結婚」	2002	Dover Kosashvili	グルジア出身の家族の一人息子の結婚をめぐる話。
<i>HaKochavim shel Shlomi</i> 'Bonjour Monsieur Shlomi' 「ボンジュール、シュロミ君」	2003	Shami Zarchin	自閉症的な高校生シュロミと彼をめぐる家族や美しい隣の少女との話。
<i>Techie ve tehie</i> 'Go and Become' 『約束の地』	2005	Rado Michaelson	スーダンの難民キャンプにいた少年がエダヤ人の女性とともにイスラエルに向かいそこで長じる話。
<i>Chochamat HaBagelah</i> 'Wisdom of Bagel' 「ベーゲルの知」	2005	Ilan Heitner	真の意味で愛せる女性を求めてやまないテル・アビブの一青年。しかし彼を魅惑する女は、いつも彼からすると逃げ出してはまた現れる。

<i>Mechilot</i> 'Forgiveness' 「許し」	2006	Udi Aloni	ホロコースト経験者の父をもつアメリカ・ユダヤ人青年の苦悩を描く。IDFに志願した彼はパレスチナの少女を誤射してしまい精神を病む。
<i>Vals im Bashir</i> 'Waltz with Bashir' 『戦場でワルツを』	2007	Ari Folman	いつも同じ悪夢に悩まされる Ari はそれがなぜだか、全く記憶を失っている。その失われた過去をもとめてレバノン戦争とともに向かった戦友とともに過去を探る旅を描くアニメーション。
<i>Im Avudim</i> 'Abandoned Islands' 「見捨てられた島々」	2008	Reshef Levi	父の浮気、女にもてる兄、その中で揺れ動く高校生の主人公。監督の若き頃のフラッシュバックとして描かれる。
<i>Chaser Menucha</i> 'Restless' 「不安」	2008	Amos Kolak	ニューヨークに住み、危うい商売を営む父のもと、自分を棄てたと父を恨む息子がやってくる。
<i>HaDikdug HaPnimi</i> 'Intimate Grammar' 「僕の心の奥の文法」	2010	Nir Bergman	大人になることを拒否し、言葉遊びをするアーロンのこのころの内を描く。
<i>Shlichto shel HaMemoneh al Moshavi Enush</i> 'The Human Resources Manager' 「人事課長の使命」	2010	Eran Riklis	A.B. Yehoshua の小説 <i>A woman in Jerusalem</i> に基づく映画。パン工場の人事課長が、エルサレムの自爆攻撃に巻き込まれ死亡する外国人女性職員の遺体を彼女の故郷に運ぶ過程を描く。

また、この表には無いが、2002年 *Ahava Colombianit* (「コロンビアの恋」)、2009年 *Sipur Gadol* (「大きなお話」) といった、荒唐無稽なコメディですら、そのテーマは自分探しに行き着く。前者では、マリワナやドラッグ、買春、一見清純なコロンビア娘、神秘主義的なカルト集団など次から次へと挑戦しては自分を探し続ける30歳の独身貴族男を中心に話が展開する。後者では、あまりにも肥満で妻に浮気されるのもそれゆえのことと、完全に自信を失う中年男たちが、日本の相撲に自己を発揮すべき場所を見出す。

2008年のアカデミー賞外国語映画賞を受賞するだろうと前評判が高かった *Vals im Bashir* (『戦場でワルツを』) はまさに自分探しのテーマの結晶だった。半ドキュメンタリーであり、シュールリアルなシーンに満ちたアニメーションであるこの作品は、ひ弱な主人公アリの失われた記憶、過去を探る物語である。

2. 女の自分さがし

女性の独白的、自分探しの映画は少なく、*Sof haolam shemealah* (‘Turn left at the end of the world’ 「この世界の端で左折して」) や *Meduzot* (‘Jelly Fish’ 『ジェリー・フィッ

シュ』) ぐらいしか思いつかない。「この世界の端で左折して」の監督は Avi Nesher であり、インドから帰還した家族の娘とモロッコから帰還してきた家族の娘との友情を描いているが、焦点はむしろそのインド人の父親の落胆、浮気、そして新しい希望に向けられている、という意味で、やはり男の自分探しの映画である。

一方で『ジェリー・フィッシュ』は、心身ともども定まらない、不器用で孤独なテル・アビブの女性を中心に3つの話が展開する。結婚披露宴の最中に足を折り、カリブ海への新婚旅行を断念、テル・アビブ・ビーチ沿いのホテルを新婚旅行先にしなければならなくなった花嫁ケレン、そのホテルのスイートルームに滞在する詩人と心を通わす花婿、ホロコースト生存者である老女のケアをするフィリピン人女性ジョーイ。それぞれは一見繋がりが無い。しかし、ある日、結婚式場のウエートレスとして働く主人公バティアがビーチに佇んでいるとき、5歳ほどの空色の眼をした少女が忽然と海から現れ、バティアについてまわる。そして、また何日かしてその少女が突如姿を消すと、これらの人々が繋がりを見せ始める。それぞれが、テル・アビブの海岸をただようジェリー・フィッシュのような存在として。

今日イスラエル映画で描かれる心の悩みは、イスラエルに特徴的な戦争体験、エチオピアでの飢餓体験、イスラエル帰還した移民たちの落胆と挫折感だったりするが、その根幹にあるものは、この世のだれもが経験する心理问题である。それは恋愛や結婚、家族やキョウダイとの問題や、愛する人との突然の別れや死、近代社会の中の孤独の問題である。

イスラエル映画は、かつてのシオニズム宣伝(四方田 2004, 2005, 2006)、建国のプロセス、ホロコーストの記憶といった、国民の多くが共有するテーマ、ナショナリズム(Hakak 2001, Nadjari 2009)に関わるテーマから移行し、個人的体験、個人の心理、そして、成長のプロセスにおいて当然のように存在する悩みを密に描くようになってきた。若き頃、古き良き時代を振り返る作品が多く、性的コントロールのきかない若者の、恥も楽しみも全て網羅して吐き出すこと ~監督自身の癒しのプロセス~として映画が作られるかのようだ。

3. イスラエルと日本映画

国際映画市場での日本映画というと、黒沢、溝口、小津であったし、そして近年では北野である。イスラエルにおける日本映画シーンも同様のことがいえる。一方、シネマテックやエルサレム、ハイファ映画祭などでも日本映画は常に紹介されている。2000年『独立少年合唱団』『フィルム・ノワール』など、日本ではほとんどの人がみたことのない映画が上演されていて好評を得ていた。

しかしながら、アジア映画はエキゾティズムの対象として、西洋文化以外にも興味と関心を寄せてくれるインテリ層の見る芸術作品であり続けている。襟をただして見る。日本の映画をイスラエルの映画館で見るとき、おかしなシーンでゲラゲラ笑ったりすると、イスラエル人の観客から「シーーッ」ととがめられることがある。

また、日本映画について、イスラエルの知人がこんなことを言った。「日本映画はとても好き。でも、あまりに会話が少ないから、ときどき Say something!!」って叫びたくなる」。この無言のシーンをイスラエル人はエキゾチックとみるか、あるいは、とまどい、いらつくのである。

4. 『おくりびと』

『おくりびと』が日本映画では初めてというアカデミー賞外国語映画賞を受賞したとき、主人公を演じた本木雅弘の姑にあたる女優、樹木希林がインタビューを受けてこんなことを言った。「ええ？イスラエル映画の『戦場でワルツを』がとったんじゃないの？本木には、『今回アカデミー賞をとるのはイスラエルの『戦場でワルツを』のはずだから、とにかく会場の雰囲気を楽しんでらっしゃいよ』と言って送り出しました。」と最後まで『戦場でワルツを』を褒め称えてやまなかったということだ。この数ヵ月後には『おくりびと』はイスラエルのシネマテックで連日上映され大好評を得る。

『おくりびと』は、多様なメッセージを秘めている。日本の現代事情、とりわけクラシック音楽をバックアップする団体の脆弱なところ、風前の灯となった銭湯、葬儀を扱う職業への差別、妻子を突然捨てて姿をくらました男の孤独、子供を捨てた母親の罪悪感。物語は女装主義者にまで話を広げる。そうした事柄がモザイクのようになって、死者を送る職業が存在することすら知らなかったチェリストの周りを巡る。

しかし、『おくりびと』のテーマはどの人間ももつ生と死への関わりである。主人公は死者をあな世に送り出すという過程を「手伝う」という一見おぞましい仕事を知り、習得することにより、その美に傾倒し、そのプロセスのなかで自分自身を知ることとなる。実は、イスラエルの映画の特徴として上にあげたことが、この『おくりびと』にあてはまるのだ。

結語に代えて：エラン・リクリス (Eran Riklis)

1990年代からイスラエル・ファンドのポピュラー化とともにイスラエルは映画を国民文化の位置においてきた。それは、ケーブルとともにチャンネル数が倍増したテレビの

脅威との闘いでもあったが、イスラエル人の不安や社会的両義性を極めて雄弁に物語ろうとする姿勢をうまく反映した。宗教的／世俗的、西洋／中東、新／旧、ポストモダンと伝統、異性愛と同性愛、ジェンダー・ポリティクス、それらの狭間で揺れ (Talmon and Peleg 2011)、もがく心をこれでもかこれでもかと描いてきた。

今日のイスラエル映画では、そのもがく心は、一人の孤独な青年の心をえぐるような、過去の、子供のころの、あるいは成長する時の苦悩や喜びに戻り自分探しをする過程の描写に表出している。エラン・リクリスはその過程に、「他者」への眼を織り込む。

『シリアの花嫁』は、ドゥルーズの家族や、シリア人、ロシア人を中心に話が展開する。映画は、シリアとの国境に位置する両国のパスポート・コントロールを冷笑し、排他的かつ父権主義のドゥルーズの権威者たちを嘆き、その全くイライラさせるシーンを延々と続けたあと、最後に凜として立ち上がる花嫁と姉を賞賛する。この映画は、ドゥルーズの人たちからは冷ややかに受け取られたが、そうであっても、イスラエルの中の他者に向ける眼がなくてはならないことを、リクリスはシンプルな形で主張したことを評価したい。

「人事課長の使命」では、クリスチャンのルーマニア人女性 (A.B. Yehoshua の原作ではロシア人)、しかも会ったこともない、すでに死した女性への関わりを描く。妻に愛想をつかさされ、仕事以外することのなかった中年の主人公は、異国で死者の家族たちに触れることにより自分を取り戻していく。この意味で、「人事課長の使命」は日本の『おくりびと』と本当によく似ている。

こうした「他者」を見つめる視線がフィーチャー映画にももたらされてイスラエル映画はもう一つの地平を開いていく (Loshitzky 2001, Shohat 2001)。この地平はさらに深く広がりを見せるだろうか。

参考文献

- Hakak, Lev, 2001, *Modern Hebrew literature made into films*, Lanham, Maryland: University Press of America.
- Loshitzky, Yaefa, 2001, *Identity politics on the Israeli Screen*, Austin: University of Texas Press.
- Shohat, Ella, 2001, *Israeli Cinema: East/West and the Politics of Representation*, Austin: University of Texas Press.
- Talmon and Peleg (eds.), 2011, *Israeli Cinema*, Austin: University of Texas Press.
- Yehoshua, Abraham B., 2004, *A woman in Jerusalem* (translated by Halkin, H.), A Harvest Book, Harcourt, Inc.

第Ⅱ部：日本におけるヘブライ文学とユダヤ学

四方田 犬彦『心は転がる石のように』 ランダムハウス講談社、2004年。

——『見ることの塩』 作品社、2005年、

——『パレスチナ・ナウ』 作品社、2006年。

三宅 良美「ドラマ映画を通じてイスラエルを論じること」秋田大学教育文化学部研究
紀要第62号、2007年、103-107頁。

Nadjari, Raphael, 2009, *A History of Israeli Cinema*. NMC United. (DVD)